

子どものやる気を引き出す学習環境

近年、子どもたちの学習意欲の低下が問題になっています。物質的な豊かさ、社会の不透明感に加え、学校の抱える構造的な問題が背景にあるようです。子どもたちの学ぶ意欲を高めるために、大人はどのように働きかけるべきなのでしょう。ユニークな「辞書引き学習」で知られる立命館小学校校長の深谷圭助先生に、子どもたちの意欲を高めるための工夫、家庭で心がけるべきことをうかがいました。



社会の変化により 学習への動機付けが希薄に

近年、子どもたちの学習意欲が低下している原因は、大きく2つあると私は考えています。一つは社会の変化の問題、もう一つは学校・教師のあり方の問題です。

かつての社会は、生活上の多くのことが個人に任されていました。ちょっとした家電の修理や、衣料の修繕などは、家族のだれかが行ったものです。もちろん、手間はかかりますが、そのぶん知識や技術も身につきました。知識と技術が身につけば、何が必要なのか、足りないのかが見えてきますし、それが知識の探求や学習の動機付けといったものにつながることも珍しくありませんでした。

しかし、世の中がどんどん便利になり、さまざまなサービスが手軽に得られるようになると、自ら解決しなければならない事柄は少なくなります。そのため、物事に対する問題意識や関心が希薄になってきます。これ

は、社会全体の傾向ですが、子どもたちの知的な好奇心や学習意欲にも大きく影響していると考えられます。

また、近年、多くの大企業で成果主義の導入が進み、高い学歴をもっていることが、将来の安定につながるものではなくなりつつあります。世界的な企業が一朝にしてつぶれてしまうことも珍しくありません。学歴が必ずしも人生を保障してくれるものでないと気づいた子どもたちが、学習に向かう意欲を失うのはある意味当然といえます。このように、社会の変化により学ぶ意欲は確実に低下しているのです。

教師の世代交代で 教育力の維持も課題に

さらに深刻なのは、学校・教師側の要因です。学校での学習内容は、学習指導要領によって定められていますが、当然ながら、それらが子どもたちの知りたいと思っていることと一致するとは限りません。学校教育の

宿命といえるものですが、だからこそ、教師は子どもたちの興味関心を刺激しながら、教えなければならないことをきちんと身につけさせる必要があります。

児童の興味関心を喚起するためには、教師に十分な準備と力量がなければなりません。しかし、近年、現場の教師の指導力は低下傾向にあるといわれます。たとえば、漢字が覚えられない子どもがいたとします。本来ならば、漢字の性質や成り立ちなどを踏まえて、どうしたら楽しく覚えられるかということを考えて指導する必要がありますが、中にはただ機械的に書かせて覚えさせようとする教師もいます。これでは、子どもは楽しくありませんし、覚えようという気にもならないでしょう。漢字の勉強に限らず、教師の指導方法いかんで、子どもたちの学習意欲は大きく変わってくるのです。

教師の指導力低下の背景には、急速な世代交代があります。近年、教育現場では団塊世代が退職期を迎え、教師の若返りが進んで

います。若手教師は教育への思いが強く、子どもたちを引っ張るパワーと情熱がありますが、経験の面ではベテラン教師に及びませんが、かつては、若手がベテランの授業を見たり、アドバイスを受けたりしながら指導力を高めてきましたが、近年はそうしたノウハウの伝承がされないまま、ベテランが大量退職してしまい、経験に裏打ちされた教育力を維持することが難しくなっているのです。このように、学校や教師側の問題も子どもの学ぶ意欲づけに深い影を落としているのです。

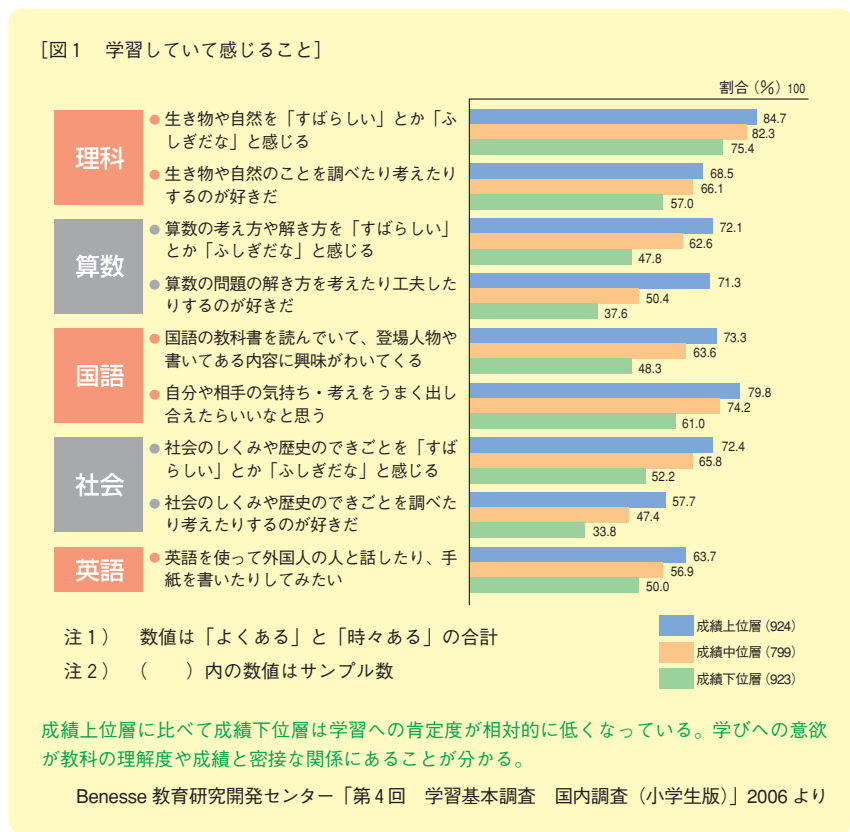
子どもが自分の成長を実感できるコミュニケーションを

子どもたちの学習意欲を高めるために、われわれ大人は、どのように子どもたちにアプローチすればいいのでしょうか。

一つは、勉強ができる、できないにかかわらず、子どもたちが学ぶ喜びを実感できるような働きかけることです。現在、学校教育において、子どもを評価する指標は、テストの点数や通知表の成績が中心です。テストができる子どもは、自分自身の成績や努力にプライドをもてますが、点数が取れず認められる機会がない子どもは、評価されることで自分ができないと思ひ込み、学習意欲は低下してしまいます。

本来、子どもは成績の良し悪しにかかわらず、新しいことを知りたい、自分自身を成長させたいという欲求をもっているものです。そうした知的欲求を引き出すためには、自分自身が成長しているという実感、自分もがんばれるという自信を持たせることが必要です。

そのために大切なのは、子ども自身が主体的に物事を調べたり、疑問を解決したりす



るよう働きかけることです。子どもが何かに疑問を持って質問してきたら、はぐらかしたり、すぐに答えを教えたりするのではなく、一緒に調べてあげたり、子どもが自分で調べように仕向けたりする。そして、最終的には、子ども自身が答えを導き出せるように働きかけるのです。

そしてもう一つ大切なのは、子どもが答え

を導き出したときはもちろん、答えを導き出せなかったときも、その努力のプロセスをほめてあげることです。結果についてだけでなく、その過程においても意欲づけを行うのです。学ぶ喜び、自分が成長しているという実感をもたせることは、子どもが自ら学びに向かう姿勢を養ううえで重要です。

子どもは大人の庇護を受けて生きている

だけに、常に大人にほめられたい、認められたいという思いを抱いています。「すごいね」「お父さんは知らなかったよ」「また、今度教えてね」などといって、子どもに花を持たせてあげることで、子どものやる気は俄然増すのです。

ほめ方にも工夫が必要です。子どもの努力を認め、ほめつつ、「じゃあ、これはどうなっているんだろう」と、次につながるように問いを投げかけて導くことが大切です。重ねて疑問を提示することで、子どもの興味もどんどん広がり、学ぶ喜びを実感できるようになるでしょう。

「辞書引き学習」で 学ぶ意欲を喚起

私が実践してきた辞書を引かせる指導も、子どもたちの学習意欲を引き出すうえで大きな効果を発揮してきました。

本来、学習指導要領の規定に則れば、国語辞典の指導は早くて小学校3年生です。しかし、言葉の吸収力がピークに達するのは、小学校低学年の時期。幼少期の子どもは、耳を通して言語能力を身につけていきますが、幼稚園の年長のころから、言語に対する関心は話し言葉から書き言葉へと移っていき、小学校1年生から2年生くらいに頂点に達します。学ぶ意欲の高いこの時期に、辞書を使って自ら学ぶ機会を提供することで、子どもたちが発見することの喜びに気づくのではないかと考え、小学校1年生から辞書を与えて、調べた語にどんどん付箋を貼っていく指導を実践したのです。

その効果はてきめんでした。子どもたちは「なぜだろう」「もっと知りたい」という思い

で、手当たり次第に言葉を調べ始めました。中には、ぼろぼろになるまで使い込む子や、調べた単語に貼り付けた付箋が2000枚に達した子もいました。さらに、言葉を調べるだけではなく、知っている単語を探したり、百科事典の代わりに使ったりと、辞書を引く行為自体を楽しむようになったのです。

もちろん、小学校1年生ですから、辞書の内容のすべてを理解できるわけではありません。しかし、私は辞書を引くことそのものが大切であると考えています。先ほど述べたとおり、学校教育では多くの場合、できる、できないだけが評価の対象となるため、成績が悪いと、自分はできないと思い込んであきらめてしまう場合が少なくありません。

しかし、辞書引きはそうではありません。分からないからこそ引くのであり、分からなかったことに気づくことそのものに価値があります。その中で、少しでも理解できる部分があれば、それだけでも子どもにとっては大きな進歩です。知らないことは恥ずかしいことじゃない、今分からなくても、将来分かるようになるという意識をもたせることが大切なのです。また、あえて分かっていることを引くことで、自分が十分理解していなかったことに気づくこともあります。これも、学ぶ意欲づけにおいて大切なことです。

自分ですることの面白さに 気づかせることが大切

努力したという実感を持たせやすいのも辞書引きのメリットの一つです。調べた単語に付箋を貼り付けさせれば、どれだけ子どもが辞書を使ったのか一目瞭然になります。付箋の量を見て「すごいね」「がんばったね」などと、ほめてあげれば、子どもたちはますます

積極的に辞書引きに取り組むようになります。努力すること自体が大切だということに気づかせるうえでも辞書引きは有効です。

また、学習意欲を喚起するには、ある程度、子どもの自由を尊重することも大切です。教科書は基本的に最初から読むように作られています。辞書はどこから引いてもいいですし、何を調べるのも自由です。授業では、この言葉を調べなさいと教師が一方的に指示するのではなく、全教科において辞書を座右に置き、分からない言葉があれば、その都度、自主的に調べさせるようにしています。学ぶ自由を保障することは、子どものやる気を引き出す重要なファクターの一つなのです。

辞書引きを日常的に行っている子どもたちは、難しい本も積極的に読むようになります。小学校3・4年生で、岩波新書や中公新書などの大人向けの本に挑戦する子もいます。小学校1年生で辞書引きを体験した子どもたちが中学生になったとき、『六法全書』を使わせたところ、苦もなくページをめくり続けたこともありました。

小3の新書にせよ、中学生の『六法全書』にせよ、実際には理解できない部分も多かったと思います。しかし、それ以上に、とにかく読んでみよう、分かるところだけでも吸収しようという前向きな姿勢こそが重要なのです。自ら学ぶ意欲は、高校・大学進学のみならず、社会に出たのちまでも大きな武器になることでしょう。

家庭で興味・関心の ベースを養う

近年は子どもが小学校に入ると、しつけは家庭で、勉強は学校で行うものというふう

役割分担を決めている保護者が多いように感じます。しかし、子どもにとっては、生活上のあらゆることが学習です。子どもの疑問にとことん付き合う、子どもが努力をしたらしっかりとほめる。こうした働きかけは、学校だけではなく家庭においても大切です。

家庭で辞書引きを試みるのも有効な方法の一つです。ただし、親が一方的に、これを引きなさいというふうにすると、子どもは興味をなくしてしまいます。また、両親が辞書を引かないのに、子どもだけに引きなさいといっても、やる気は起きません。子どもがある言葉に興味をもって質問してきたら、「辞書にはなんて書いてあるの」などと水を向けてみる。あるいは、親が率先して辞書を引く姿を見せたり、親子で一緒に調べたりする。子どもが辞書を引きたくなるような環境をいかに作るかがポイントになります。

もう一つ、保護者の方に心がけてほしいのは、子どもの興味・関心のベースになるような原体験を、できるだけたくさん積ませてあげることです。ある日、突然、子どもに何がしたいのか、自分には何が向いていると思うかとたずねても、すぐに答えられる子はそれほど多くありません。そうした目標や夢は、自身の体験に基づいて自然と湧いてくるものだからです。できれば、子どもが忙しくなる前の低学年時まで、さまざまな体験を積みませ、充実した子ども時代をすごさせてあげていただきたいと思います。

子どもの学習意欲を高めるための王道はありません。家庭も重要な学習の場であるという意識をもって、子どもの学ぶ機会を増やしていくことが、子どもの可能性を広げる第一歩になるのです。

辞書の活用を通して 発見する喜びを知る

深谷先生が小学校1年生に対して、辞書を引かせる指導を始めたのは15年前のこと。

50音を学ぶ時期に辞書を引かせるのは、一見困難に思えます。しかし、実際には小学校1年生の子どものほうが、3年生から辞書を引き始めた子どもよりも意欲的に辞書を引くといえます。片時も辞書を離さず、給食を食べる間も惜しんで辞書を引く子、辞書で引いた言葉の数を友達と競い合う子もいるのです。

語彙力が増すことで、言語感覚が養われることも、辞書引きのねらいの一つ。人間の営みにかかわるあらゆる事柄は言葉で説明できます。また、物事を考えたり、何かの計画を立てたりする場合も言語を使います。言語を使いこなすことは、生活そのもの、考えることそのものといえるかもしれません。言語が豊かであればあるほど、考える力も増していくのです。

また、語彙や会話、文章の能力は、小学校段階である程度決まってきます。ですが



らこの時期に、どれだけ多くの語彙を習得し、使えるようにできるかが、のちの学習活動に大きな影響を及ぼします。たとえば、算数や理科などの理系科目も、言語を通して学習が展開されます。テストでも文章題の文意が読み取れなければ、いくら公式や定理を覚えていても問題を解くことはできないのです。

「子どもたちがやりたいという気持ちさえもてば、1年生でも2年生で学ぶ漢字を進んで覚えようとしています。大切なのは、教師が学ぶきっかけをどれだけ与えられるかなのです」と深谷先生。

子どもたちの学びに対する潜在的な欲求は、大人が考えている以上に強いのです。子どもの可能性を広げるのも決めるのも、周りの大人たちの意識にかかっているのかもしれない。(取材後記)

Profile

深谷圭助 (ふかや・けいすけ)

立命館小学校校長、立命館大学非常勤講師。教育学博士。主な著書に『7歳から「辞書」を引いて頭をきたえる』(すばる舎)、『立命館小学校メソッド』(宝島社)、『なぜ辞書を引かせると子どもは伸びるのか』(宝島社)、『チャレンジ辞書引き道場「はじめての辞書引きワーク」』(ベネッセコーポレーション)などがある。